P3-37.
経鼻内視鏡による食道・胃癌発見率の検討

(内視鏡センター)
○山本　圭、河合　隆、福澤　麻理
山岸　哲也
(消化器内科)
立花　浩幸、羽山　弥毅、野中　雅也
青木　貴哉、八木　健二、福澤　誠克
近藤　麻里、片岡　幹統、川上　浩平
酒井　義浩、森安　史典
(消化器外科)
高木　融、青木　達哉

近年細径経鼻内視鏡が急速に普及している。しかし内視鏡画質が劣る、水切れ機能が悪いなどの問題点から診断が不十分になる可能性が指摘されている。そこで今回我々は、経鼻内視鏡による食道・胃がんの発見率、さらに経鼻内視鏡の観察方法について検討した。

【方法】 対象は2005年1月から2008年6月までに経鼻内視鏡 (XP260N、260M、EG530N) を施行した1,578例中、早期 (表在) 食道・胃癌23例および胃腺腫6例である。観察方法としては、① WL群：通常観察のみにて診断可能 (胃では近接観察・遠景観察に分けた)、② NBI群；NBI併用にて診断可能 (NBIにてbrownish areaと診断)、④ DYE群：色素内視鏡にて診断可能の3群に分けた。

【結果】 食道・胃癌発見率は、1.52%と非常に高率であった。癌のタイプは、食道がん0-IIa：2例、0-IIc：2例、表在癌2例と早期がん2例であった。胃癌は、0-I型：1例、0-IIa：6例、0-IIc：11例、0-IIa＋IIc：1例の早期胃癌19例であった。観察方法に関しては食道癌4例では、WL群2例、NBI群4例、DYE (iodine) 群：4例であった。一方、胃癌は全例近接観察が必要であった。さらにWL群14例、NBI群：14例、DYE (Indigocarmine) 群：19例であった。胃癌のNBIは認識向上性はできなった。胃腺腫においてもWL群4例、NBI群：4例、DYE (Indigocarmine) 群6例であった。

【結語】 経鼻内視鏡では、食道・胃癌の発見率は高率であった。一方、食道血管透見像の描出が悪く、早期食道がんを見落としやすい。積極的にNBIを併用して、brownish areaあるいはspotを見つけることが重要であった。一方胃癌に関しては、近接観察を全領域にて行い、粘膜面の異常が疑われれば、積極的にIndigocarmineによる色素観察を併用する必要があると思われた。

P3-38.
胃癌間質に浸潤する顆粒球とマクロファージと癌進展の検討

(外科学第四)
○中地　健、劉　煥然、春日　信弘
田渕　崇伸、長田　大志、春日　照彦
竹村　晃、佐谷　徹郎、島崎　二朗
小西　栄、片野　素信、渡辺　善徳
後藤　悦久、生方　英幸、中田　一郎
田渕　崇文

癌の浸潤転移は癌間質の微小環境が関与している。がん間質へのリンパ球浸潤例は予後が良いと言われてきた。しかし癌細胞は炎症に関する免疫担当細胞を利用して有利な環境を構築している報告もある。我々はdeath receptorであるFasLを多く発現している胃癌の予後は悪いことを報告、そのFasLは癌間質リンパ球をアポトーシスに誘導する可能性もある。実験的に癌細胞にFsaLを発現させると好中球浸潤が惹起される報告もある。このような背景で、今回胃癌組織に浸潤する顆粒球 (tissue infiltrating granulocytes TIGs) と腫瘍関連マクロファージ (tumor associated macrophages TAMs) と臨床病理学的は意義を検討した。

【材料と方法】 胃癌切除例130例を対象とし、胃癌組織浸潤TIGsとTAMsを免疫組織化学染色で観察した。抗体はTIGにはmonoclonal mouse anti-granulocyte、TAMにはmonoclonal mouse antibody CD68を用いた。判定基準は一視野での染色陽性細胞数で (−) ＜10個、(＋) 10〜30個、＞30個 (＋＋) とした。

【結果】 TIGsとTAMsの発現率はそれぞれ62.3%、50.0%であり、両者に正の相関が見られた。臨床病理学的因子との関連では、TIGsは壁深達度、リンパ節転移度、進行度と相関した。TAMsは臨床病理学的因子との相関は見られなかった。TIGsの程度が強い症例ほど予後は不良、TAMsの程度が弱い症例は予後不良であったが多変量解析ではTIGsの程度は予後を規定する因子であった。

【結論】 胃癌において、組織の微小環境に浸潤する顆

粒球、マクロファージは腫瘍の進展に関与していると推測された。

*P3-39.
肺癌外科手術におけるセンチネルリンパ節の同定とリンパ節転移形式の解析

(外科学第一)
○一ノ瀬修二、臼田　実男、前原　幸夫、
大平　達夫、池田　徳彦

【背景】 本邦では縦隔リンパ節郭清が予後の改善に繋がるとされ、ND2a以上の郭清が標準手術となっている。しかし欧米では根治的郭清とサンプリングによるRCTで2群間に予後の差はなかったと報告され、ステージングを目的としたサンプリングが中心となっている。一方本邦では近年になって、原発肺葉別にリンパ節への転移形式をマッピングし、根治的リンパ節郭清する範囲を縮小する報告が出てくるようになった。この積極的縮小郭清が可能となれば、手術時間の短縮や合併症の抑制にも繋がるものと考える。その一つの方法がセンチネルリンパ節ナビゲーション手術であり、色素法やRI法による有効性が報告されている。
【目的】 赤外観察カメラとインドシアニングリーン(ICG)による蛍光法で、センチネルリンパ節の同定とその妥当性について検討した。
【方法】 術前に肺癌の確定診断が得られている原発肺葉にICGを局注し、リンパ節およびリンパ流路を観察した。またND2a以上の郭清を施行し、領域別にリンパ節をex vivoで観察した。
【結果】 右上/右下/左上/左下が各々11/2/5/2で計20例に施行し、腫瘍径は15-120 mmで平均41 mm。全例で一個以上のリンパ節を蛍光画像として観察可能であった。病理病期はIA/IB/IIA/IIB/IIIA/IIIB/IVはそれぞれ3/8/1/1/5/1/1/1。pN1の3例のうち2例は転移リンパ節がセンチネルであったが、1例はセンチネルが陰性にも関わらず#14、#10が転移陽性であった。pN2の症例ではスキップ転移は存在せず、1群のリンパ節転移が全例に認められ、それらは全てセンチネルであった。
【結語】 本方法は肺癌におけるセンチネルリンパ節の同定に有効であった。pN1で蛍光の無かったリンパ節に転移を認めたものがあったが、これはより腫瘍に近い#14への転移によってリンパ流路が変わったためかもしれない。尚、本研究の一部は平成20年度東京医科大学研究助成金と、文部科学省分科学研究費補助金若手研究 (B) の研究助成により行われたことを記しここに謝意を表します。

P3-40.
Analysis of MicroRNA expression in colon adenocarcinomas

(大学院四年・外科学第三)
○新後閑正敏
(病理学)
田中　正視、黒田　雅彦
(外科学第三)
土田　明彦、青木　達哉

miRNA (micro-RNA) とは、細胞内に存在する長さ20から25塩基ほどの1本鎖RNAであり、タンパクをコードする遺伝子の発現を調節する機能を持っている。miRNAは、細胞増殖、分化、アポトーシスといった生理的作用に重要な役割を果たしている一方、新たに疾患を誘発する要因としてmiRNAの変異なども視野に入れる必要性が指摘されている。特に、癌との関連においては、*mir-17-92* clusterが癌遺伝子として機能するものとして同定されて以来、癌遺伝子の発現を抑制することによりあたかも癌抑制遺伝子のように働くmiRNAも多数同定され、miRNAのプロファイリングを用いた早期癌への診断、新規分子標的治療の確立が期待されている。このような背景から、我々は大腸癌に関して、マイクロアレイ法を用いたmiRNAの発現解析を行った。その結果、大腸癌の組織中および血清中に、有意に発現が変化するmiRNAを同定した。さらに同定したmiRNAは、大腸癌の増殖に重要な役割をしていることが示された。